国立民族学博物館の収蔵品㉝

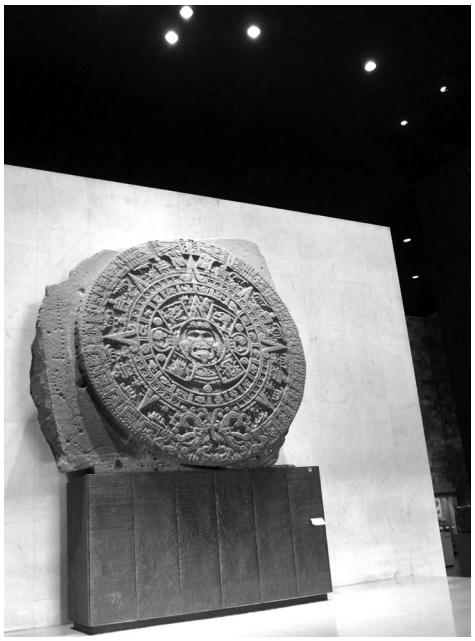
「太陽の石」の意味

国立民族学博物館には、「太陽の石」と呼ばれる直径三・六mの巨大な石彫のレプリカがある。本物は一七九〇年にメキシコ市で発見された。十六世紀まで栄えていたアステカの人々が製作したものである。表面の図像解釈に応じて、この石にはさまざまな意味が付与されてきた。中央の顔が太陽神を表しているという説から「太陽の石」という名前がついた。また二〇の日名が刻まれているため「アステカの暦石」と呼ばれることもある。現在有力なのは、儀礼的な格闘のための土俵のようなものだったとする説である。

筆者は、科学研究費の新学術領域研究の一環として、博物館における中南米の古代文明表象の比較研究に取り組んでいる。「太陽の石」はアステカの威光を伝える格好の資料であり、そのレプリカはいくつかの博物館に存在する。それらを比較することで、この石の現代におけるさまざまな意味が見えてくる。

本物はメキシコ国立人類学博物館にある。そこでは、メキシコの先住民族文化が古代から現代まで一貫して展示されている。アステカ展示場は広大な博物館の最奥にあり、「太陽の石」は、寺院の本尊よろしく、展示場中央にスポットライトを浴びて安置されている。マヤやオルメカなどいくつもの古代文明が栄えたメキシコでも、この博物館ではアステカの扱いは特別で、「太陽の石」はまさにメキシコ文化の象徴という意味を帯びている。

国立民族学博物館のアメリカ展示場「祈る」セクション。右側が「太陽の石」のレプリカ、左側がトーテムポール。



メキシコ国立人類学博物館に展示されている「太陽の石」。

一方、アメリカ合衆国のシカゴにあるフィールド博物館の古代アメリカス展示場でも「太陽の石」が見られる。コロンブスの到来以前の南北アメリカ大陸の諸社会が、人間の環境適応能力の多様性の証として紹介されており、アステカはインカとともに、広大な領域を支配した帝国型の社会として分類されている。「太陽の石」はアステカの世界観を表現するものと説明され、帝国を維持した宗教的な基盤という意味が与えられている。

「太陽の石」はスペインの首都マドリッドのアメリカ博物館にもある。十八世紀のスペイン王室の「自然史の部屋」を模した、薄暗い部屋の壁面上部に飾られている。この部屋の棚には、スペイン植民地だったアメリカ大陸およびアジア・太平洋地域の珍品が収蔵されており、その多彩さがそのまま往時のスペイン王室の権力を表現している。それゆえここでは「太陽の石」は、スペイン王室の栄華を物語る重要な一品として存在しているといえる。

国立民族学博物館の「太陽の石」は、アメリカ展示場の「祈る」セクションにあり、アメリカ大陸の人々の精神文化を示す資料の一つとして展示されている。そのため同じ部屋には、カナダ先住民族のトーテムポールや、ブラジルのカーニバルの衣装なども見られる。こうした共伴資料のユニークさは国立民族学博物館独自のものである。同じ「太陽の石」でも、このように博物館によって意味が異なるのは、展示の文脈が違うためである。そうした文脈を読み解くことも、博物館見学の楽しみの一つであろう。（鈴木　紀）